

長岡 あーかいぶす 第7号

編集・発行／長岡市立中央図書館文書資料室

<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/monjo/index.htm>

戊辰戦争から 140 年～刈羽郡中里村桐沢青柳家文書「戊辰戦争官軍長岡戦へ」～



長岡市立中央図書館所蔵の「長岡城攻防絵図」をご覧になったことはありますか。火の手の上がる長岡城を中心に、信濃川兩岸の古戦場が詳細に描かれた絵図は、戊辰の歴史を現在に伝える、長岡市の貴重な財産といえるでしょう。

戊辰戦争から 140 年を経た今年、文書資料室が整理を進めた文書の中に新たな発見がありました。中越大震災で被害を受け、取り壊されることになった蔵の中から出てきた絵図「戊辰戦争官軍長岡戦へ」(54×117cm)です。絵図をよく見ると、燃え盛る長岡城は左端にあり、片貝や朝日山の古戦場など、小千



谷を中心に描かれていることに気がきます。信濃川の青や、山なみの緑の鮮やかさ、躍動感に溢れる兵士たち、薩摩・長州藩士の墓石の一つに至るまで丁寧に描かれ、彩色が施されています。

絵図を所蔵していた青柳家は桐沢(小国地域)の旧家です。江戸時代から農業を営むかたわら、俳諧をこよなく愛し、村の仲間と句会を催したり、また、漢詩を作ったり、書に親しみました。桐沢の豊かな文化を今に伝える約 2,500 点の文書が残されています。

この絵図の作者は不明です。筆跡や自筆の「掛物まくり物短冊物帳(大正四年八月虫干改メ)」から、戊辰のころに生きた青柳三郎(大正5年没)の手によるものと推測されます。しかし、見事な描写はやはり絵師によるものか…真相はわかりません。描かれた年代や目的も不明ですが、戊辰の歴史を後世に残したいという作者の意図は十分に伝わってきます。今後、多くの文書を丹念に調べるうちに新しい事実が見えてくるかもしれません。(桜井奈穂子)



寺泊地域での歴史資料所在確認調査を終えて

歴史資料所在確認調査は、歴史資料の所在状況の把握と散逸・滅失に対応することを目的として行われます。今年度は、新潟県立文書館と共催で寺泊地域を対象に実施しました。

●新潟県立文書館と歴史資料所在確認調査

新潟県立文書館は、新潟県の歴史に関する文書等の保存・活用を図り、県民の教育・学術及び文化の発展に寄与するため、平成4年4月1日に新潟市（現中央区女池南）に設置され、同年8月7日に開館しました。この設置目的を達成するため、文書等の保存・活用をはじめ様々な事業を行っていますが、その一つに歴史資料（以下、史料と記します）所在確認調査があります。これは、県内の史料所在状況の把握と保存を啓発し、その散逸・滅失に対応することを目的とし市町村と連携して行ってきたものです。現在の長岡市域では、これまでに栃尾（平成10年度）・中之島（同12年度）・三島（同13年度）・小国（同18年度）・山古志（同19年度）の5地域で実施済みです。調査結果は、平成16年の中越大震災、平成19年の中越沖地震などの災害の際、当該地域の史料救済に大いに役立ちました。

●寺泊地域での歴史資料所在確認調査

平成20年度は、寺泊地域を対象に8月22～24日の3日間実施しました。調査対象はのべ21件（個人14、公的機関4、法人1、区有1、寺院1）で、実際の調査には17名（県立文書館4名・長岡市5名・長岡郷土史研究会8名）があたりました。調査対象については、県史及び町史編さんにご協力いただいた史料所蔵者の方々や、文書資料室が調査前に寺泊地域に全戸配布したチラシをご覧になり調査を希望された方を中心に依頼しました。なお、期日の都合がつかない等の理由で調査できなかったところもあるため、今回調査対象となった21件が当地域に所在する史料のすべてではありません。

平成4年の寺泊町史編さんから15年余を経過した現在、当時活用された史料等が無事に所蔵者宅に伝わっているのか確認することを主に考えていましたが、驚いたとに調査の半数近くが初めて確認する史料でした。そこ



には、町史でふれられていない寺泊の歴史を裏付ける新発見がいくつかありました。寺泊片町のあるお宅に伝わる史跡公園「聚感園」の設立過程を示す史料群は、その代表例ともいえるでしょう。また、漁業協同組合文書・塩業関係文書・篩業組合文書・海運関係文書・円上寺瀧絵図など寺泊地域の特徴をあらゆる様々な史料の所在も改めて確認できました。

今回調査した史料の保存状況は、一部ビニール袋に入れて保管するなど文書保存にとってあまり良くない方法がとられている例もありましたが、おおむね良好でした。家屋の改築や世代交代などの様々な理由で貴重な史料が散逸するケースが増えている現状がありますが、家や地域の歴史を裏付ける唯一的なものとしてこれからも大切に保存いただければと思います。

●歴史資料とは何か？

今回、寺泊地域で確認した文書で最も古いものは、おそらく慶長2年（1597）の大地村検地帳（右写真）でしょう。400年以上も前の文書がいくつもの災害（地震・水害・火事等）をくぐり抜け現在まで代々引き継がれてきたことに感動を覚えます。



一般的に年代の古いものほど歴史的価値が高いとされているようですが、現代（昭和期）のものもやがてそのように評価されるようになると考えられます。私たちが何げなく生活している今もいつかは過去（歴史）になります。仮に400年後の2408年、現在（2008年）の

生活の様子を示すようなものはどれほど伝わっているのでしょうか。新潟県立文書館では新聞折り込み広告を日々保存しています。広告はその時々や物価等を具体的に知る最良の窓口のひとつになり得ると考えるからです。また、文書資料室は平成 16 年の中越大震災発生時に止まってしまった時計の写真を収集・保存しています。これらの壊れたものたちを撮影した写真も、あの災害を物語る

将来の史料となるからです。

私たちの子孫が、昭和・平成の歴史から何を学ぶか、想像するのは難しいですが、私たち保存機関はできうるかぎりの努力をしています。これをそのまま個人の皆様をお願いするというわけにはいかないでしょうが、一つの考え方として参考にしていただけたら幸いです。

(新潟県立文書館 田辺芳春)

歴史的公文書は語る(2)

寺泊と赤泊の青年団の交流

文書資料室では、平成 19 年度、旧寺泊町役場の保存期間を経過した公文書(非現用文書)の整理を行いました。作業の結果、町民課、総務課、建設課、福祉課、産業観光課、教育委員会が作成した 947 点(ダンボール箱 59)の非現用文書を歴史的公文書として保存しました。

一番古い資料は、昭和 25 年「寺泊町勢要覧 1950」です。他に昭和 35 年「寺泊町国民健康保険運営協議会関係綴」、昭和 36 年「広報てらどまり」No.21～平成 17 年「広報てらどまり最終号」No.363、カヌーによる越佐海峡を横断した「'91シーカヤック in 日本海」大会開催に関する簿冊などがあります。



▲寺泊青年団に関する綴

寺泊の特徴的な歴史的公文書の一つをご紹介しますと、昭和 33 年「寺泊青年団事業記録綴」(体



▲第 20 回両泊親善体育大会の参加者の記念写真(1967 年)と寺泊港の様子

育部、両泊(りょうはく)大会参加)があげられます。昭和 11 年、寺泊町と赤泊村(現佐渡市)の友好と親善を図ることを目的に、双方の青年団による「両泊対抗陸上競技大会」が開催されました。太平洋戦争で中止された時もありましたが、昭和 27 年の両泊(寺泊・赤泊)航路再開を機に再開。昭和 37 年(第 15 回大会)からは球技も行われるようになり、名称が「両泊親善体育大会」となりました。現在は高速船で 65 分で行けますが、地元の発動機船 2 艘で 100 人の選手を 3 時間かけて赤泊へ渡したこともあるそうです。「両泊親善体育大会」は現在も継続され、来年 6 月には第 60 回大会を迎えます。第 1 回大会の綴りが現存しないのは残念ですが、寺泊と赤泊の青年たちの交流の歴史をさぐる貴重な記録です。

平成 21 年 10 月、寺泊地域ではトキめき新潟国体カヌー競技が開催され、地元選手の活躍とともに、スポーツを通じた地域間交流も期待されます。現在作成されている新潟国体関係の公文書もやがては地域の歴史を語る記録になります。これまでの交流の記録とともに、大切にしたいと考えています。(稲垣美知子)



文書の虫 ～テーマ 直江兼続とその時代～

「本の虫」ならぬ「文書（もんじょ）の虫」が増えることを祈りつつ、
テーマに関する文書と参考文献を所蔵資料の中からご紹介します

●小林虎三郎の父・又兵衛が描いた坂戸城



▲「海岱日録」（相沢富士雄家文書目録No.597）

直江兼続は、永禄3年（1560）に坂戸城主・長尾政景の家臣・樋口兼豊の長男として、上田荘（現南魚沼市付近）で生まれました。坂戸城は標高 634m の山城です。その兼続生誕の地を江戸時代に訪れて、描いたのが小林又兵衛（虎三郎の父）です。

又兵衛は、嘉永元年（1848）3月から6月にかけて伊勢参りに出かけ、「海岱（かいたい）日録」と名付けた道中記を記しました。伊勢参りの帰路、6月5日に六日町へ泊り、翌朝の船に乗り出発しています。絵図は、その記事に付されたもので「上田坂戸城古跡」と題されています。乗船した六日町から草生津へ向かう川船の中から、戦国時代に思いをはせて描いたのかもしれませんが。（小林良子）

●上田荘と上田町

長岡市上田町の地名は、兼続が生まれ育った上田荘に由来していると伝えられています。

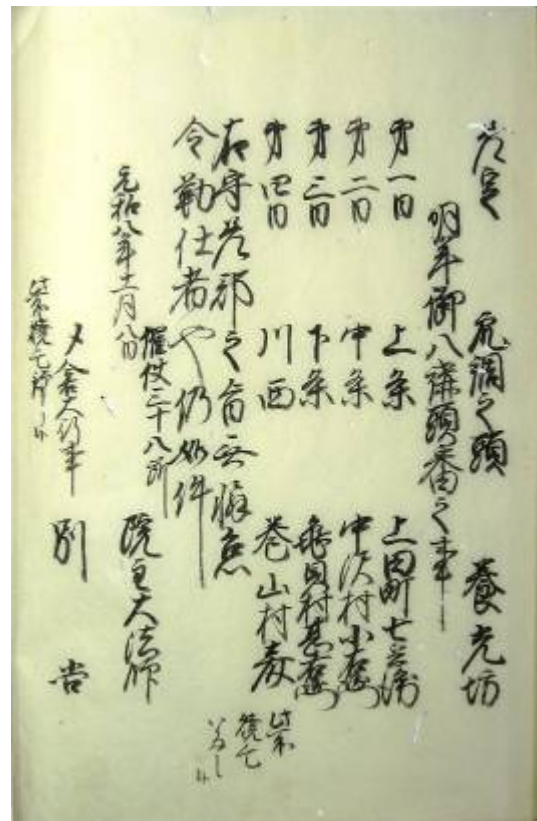
明治26年（1893）発行の大平与文次『越の寄ふみ』第7号（相沢富士雄家文書目録No.508）には、「元和二年堀家魚沼郡坂戸より移封の砌り旧領上田荘より随従せし町人は裏町通りの西に一町を開き南側（北側は多く家中及び寺屋敷也）に居屋敷を賜はり上田町と名く」とあります。元和2年（1616）、堀直奇が坂戸から長岡へ移封された際、領民を連れてきて住ませたことに因むというのです。残念ながら記述の典拠はわかりません。

「皇神御用記」には、元和8年の王神祭の当人（宿当番）として「上田町 七兵衛」が見えます。兼続が亡くなってから3年後には、上田町が存在していたことは確かです。七兵衛も兼続と同郷の人物だったのでしょうか。（小林良子）



【参考文献】今泉省三『長岡の歴史』第1巻

（野島出版、1968年）



▲「皇神御用記」（元和8年の部分、安禅寺文書目録No.106）

●慶長2年の検地帳と安禅寺文書

文書資料室は、直江兼続が生きた時代に作成された慶長2年（1597）の検地帳を所蔵（寄託）しています。兼続配下の与板衆・河村彦左衛門尉を奉行として実施された検地（河村検地）で作成された検地帳です。ほとんどが蔵王分（蔵王権現領）のため、全容を知ることはできませんが、地名や人名など兼続が生きた時代の村のすがたを伝える貴重な記録です。

これらの検地帳を含む安禅寺文書 848 点を今に伝えた担い手の一人が、幕末に蔵王代官を務めた阿部信成です。阿部は、享和2年（1802）に南蒲原郡末宝村（現中之島地域）に生まれ、天保6年（1835）に蔵王代官に就任しました。蔵王権現に残されていた古文書を整理・筆写し、約100冊に及ぶ「御用記」をまとめました。自らが記した綱文（見出し文）の一覧を「御用記條箇」（索引）として作成するなど、現代風に言えばアーキビスト（記録を保存・管理する専門職）的な役割も果たしています。

阿部は、慶長2年の検地帳も筆写しました。「御用記」（宝徳2年～宝永7年）（目録No.112）の慶長2年9月の綱文に、「一 蔵王御神領村々古来御検地帳拾六冊、外ニ割合勘定帳三冊、都合拾九冊写、左之通、尤本帳者御検地帳入箱之内ニ入置候也」と記されています。「古来検地帳」16冊と「勘定帳」3冊の合計19冊を筆写したこと、これらが「御検地帳入箱」に保管されていたことがわかります。

しかし、阿部は筆写した19冊全てを「御用記」に収録したわけではないようです。検地帳は16冊で合いますが、勘定帳は「惣都合勘定之本」1冊を収録するのみで、蔵王堂衆徒分（看坊の名寄）1冊を加えたとしても1冊足りません。実は、安禅寺に伝わった慶長2年の検地帳の伝来状況については問題点が残されています。右の表は、慶長2年の蔵王分の検地結果を記したと考えられる「惣都合勘定之本」（目録No.22）に見える村々と、その検地帳の「御用記」への収録状況、及び原本・写本の現存状況です。



▲「惣都合勘定之本」（小曾祢・亀貝・富嶋・福嶋村）

【参考文献】『長岡市史』通史編上巻、長岡市史双書No.18『検地帳に中世を読む』、同No.46『蔵王権現領安禅寺御用記（2）』

記載順	村名 ※表記は原文のまま ※()は現行地名等の備考	御用記 目録No.112	原本・写本 目録No.	
1	桂澤村	○	○	71
2	片貝村	○	○	70
3	中澤（中沢）村			
4	鉢伏	○		
5	長倉村	○	○	68
6	上条村	○	○	68
7	宮内村	○	○	67
8	四良丸（四郎丸）村	○	○	65
9	奈町（荒町（新町）か）	○	○	66
10	河崎（川崎）村	○	○	21
11	堀江村之内			
12	門前屋敷			
13	新保村			
14	堀金村			
15	小曾祢（小曾根）村	○	○	63
16	亀貝村	○		
17	富嶋（富島）村	○		
18	福嶋（福島）村			
19	稲葉村	○	○	69
20	頸城郡吉岡村	○	○	64
21	失田（矢田か）村			
22	藤井村（刈羽郡）	○		
23	河西芹河（芹川）村			

※目録No.は、安禅寺文書の目録番号

この表から考えられることを整理すると以下のとおりになります。①「惣都合勘定之本」は蔵王分（蔵王別当分）の23の村の検地結果を一覧にしたものです。②「御用記」には「惣都合勘定之本」にない、蔵王堂村（蔵王別当分）、蔵王堂衆徒分、桂澤村（全体）の3冊の検地帳も収録されています（蔵王堂衆徒分・桂澤村は原本・写本あり）。③よって、そもそも蔵王分に関する慶長2年の検地帳は26冊あった可能性があります。④ただし、1冊に複数の村を収録した検地帳もあり、冊数は不確定です。⑤なお、安禅寺文書中に原本・写本が現存する慶長2年の検地帳は13冊（表＋蔵王堂衆徒分＋桂澤村）です。

星山貢『蔵王大権現及王神史』（日本書房、1937年）によると、蔵王権現は度重なる災害に遭い、戊辰戦争・長岡空襲では文書を疎開させました。関係者の尽力による400年前の検地帳の現存を喜びつつ、阿部信成による「御用記」編さん事業に注目しながら、安禅寺文書をさらにひも解いていきたいと考えています。（田中洋史）



災害の記録と記憶(1) 復興応援セールチラシ

文書資料室が災害の記憶を風化させないため収集・保存に取り組んでいる「災害アーカイブス」の資料を紹介します。初回は新聞の折り込みチラシを取りあげます。毎日のように目にするものでも、数年後には大切な「記録」となります。チラシからどのような記憶が引き出せるのでしょうか――。

今から4年前の平成16年10月23日に発生した新潟県中越大地震。その翌日の新聞にもチラシは折り込まれていましたが、「震災」や「復興」という言葉の入ったものは地震の一週間後から出始めたようです。特徴的なものは被害を受けた店舗の営業再開を伝えるものや、地震によって少し傷がついてしまった家具の割引販売などです。その中でとりわけ枚数も多く、目立っているのは復興応援セールのチラシです。

スーパーマーケットやドラッグストア、デパートでは飲料水や非常食、日用品、防寒具などの割引セールが行われていました。当時は水道、ガス、電気といったライフラインの復旧がなかなか進まず、いつ大きな余震が起こるかかわからない状況だったため、避難生活に必要なものが安く手に入るとい



▲地震後のごみ収集場所(長岡市立六日市小学校提供)



うことは安心感を与える役割を担っていたのかもしれない。

各町内のごみの収集場所には、壊れた家具などが山積みになっていました。そのため、家具や家電製品など生活再建に必要な商品を扱った復興応援セールも行われています。



地震発生から1か月を過ぎると、復興応援セールのチラシは少なくなり、替わりにお見舞のお返し品や年賀状にお礼の文章を入れるサービスのチラシが出てきます。このころには避難所が閉鎖されていたこともあり、被災した方の暮らしもだんだんと落ち着きを取り戻してきたということをチラシからも読み取ることができます。

このように、地震後に発行された新聞の折り込みチラシからも災害時の記憶をたどることができます。それと同時に、チラシからは災害時に必要なものや暮らしの再建に必要なものを知ることができます。みなさんの周りにある災害の記録はどのようなことを教えてくれるのでしょうか？
(薮澤 梓)

編集中です！

『郷土長岡を創った人びと』

長岡市史双書No.48
『新潟県中越大地震と史料保存を考える』

文書資料室では現在、平成21年3月に刊行する『郷土長岡を創った人びと』と、長岡市史双書No.48『新潟県中越大地震と史料保存を考えるー長岡市立中央図書館文書資料室の試みー』を同時進行で編集しています。

『郷土長岡を創った人びと』は、知識経験者や、公募により選出した各地域の委員から執筆していただきます。約140ページで構成し、各地域の先人たちの業績を紹介します。

この本を通して、新市域の先人を身近に感じていただけたらと願っています。

長岡市史双書は災害と史料保存がテーマです。市民と協働で取り組んだ災害対応の4年間を振り返り、長岡市型の活動を発信したいと考えています。

文書資料室では、発行に向けて職員一同がんばっています。楽しみにしてくださいね！



(古川絵理)

高野 余慶

1729-1815

長岡藩9代藩主牧野忠精は藩校崇徳館を創設して、古学派（江戸時代の儒学一派）を採用したが、それに直接かかわったのは高野栄軒と余慶父子であった。高野栄軒（名は永貞。栄軒は号）は、家老山本義方（老迂斎）の命を受け、藩主牧野家の家譜を編修し、藩内の学問の興隆に力を尽くした人物である。

余慶は、享保14年（1729）に栄軒の長男として生まれた（名は常道、通称は泰助、余慶は号）。父と同じく古義学を学んだ。性格は慎み深く、人情に厚く、学問を深く愛し、兵術に通じ、旧典にも詳しかった。8代藩主忠寛の信任を得て、9代藩主忠精と弟忠義の侍読（当主らに学問を教授する学者）として仕えた。忠精は余慶を厚遇し、余慶も46年間にわたって仕え、文武の振興をはかり、藩政の安定に力を注いだ。約半分の24年間は江戸勤番であった。退いた後も、四書五経を講義し、また兵書古礼を説き、若い藩士の教育に努めた。忠精と親交のあった白川藩主松平定信は余慶を「泰助は君子なり」と評したという。文化12年（1815）に87歳で没した。

高野余慶は多くの著作を遺した。大正4年（1915）刊行の今泉鐸次郎編『北越名流遺芳』第2集には余慶の著書名が17点紹介されている。「由舊録」（2巻）、「御邑古風談」（3巻）、「昇平夜話」（10巻）、「軍用家訓」（15巻）、「粒々辛苦録」（2巻）、「軍中職掌考」（6巻）、「燈前漫録」（1巻）、「古談拾要」（1巻）、「可以興辨」（1巻）、「草露傳」（1巻）、「如件談」（1巻）、「御制童子問答」（1巻）、「孝賞書」（1巻）、「幼學問答」（1巻）、「郷俗幼談」（1巻）、「鬢かかみ」（1巻）、「草綺始末略」（1巻）である。



▲高野余慶「昇平夜話」（写本）
（古志郡三之宮村佐藤家文書、文書資料室寄託）

昭和5年（1930）、互尊文庫で「贈従三位龍徳院殿牧野忠精公に関する展覧会」が開催された。このとき余慶にかかわる資料として「如件談」（1冊）、「燈前漫録」（1冊）、「御法制童子問 附録共」（2冊）、「寛政四、町村教導申合書」、「短歌」（1冊）、「忠精公より高野余慶に賜はりたる書簡及上表」（19枚）、「祖父常道君御一代御行状」（1冊）、「狂歌」（1冊）、「御制童子問」（1冊）、「上書草稿写し」（1冊）が出品された（下線前出）。

注目されるのは「忠精公より高野余慶に賜はりたる書簡及上表」と「上書草稿写し」である。上表・上書とは君主に奉った文書のことであるが、名君といわれた忠精と余慶はどんなやりとりを交わしていたのだろうか。

昭和6年には「郷土人著作物展覧会」が開催され、余慶の著作として「可以興辨」、「御制童子問答」、「昇平夜話」（10冊）、「軍用職掌考・軍用家訓」、「燈前漫録」、「由舊録」（2冊）、「檜の葉柏」（3冊）、「和語大要農家餘力抄」（3冊）が出品されている（下線前出）。

以上、『北越名流遺芳』と二つの出品目録から余慶の著作名を挙げた。紹介した著作の多くは戊辰戦争、長岡空襲の戦禍などで、現在、所在不明である。今後、改めて確認され、それによって、余慶と古学派、崇徳館とのかかわりなどが詳細になることを期待している。

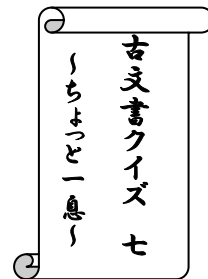
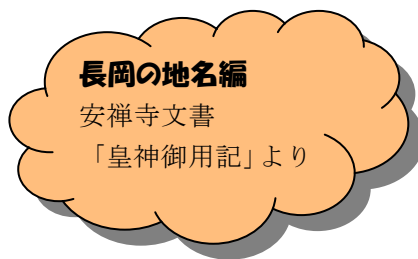
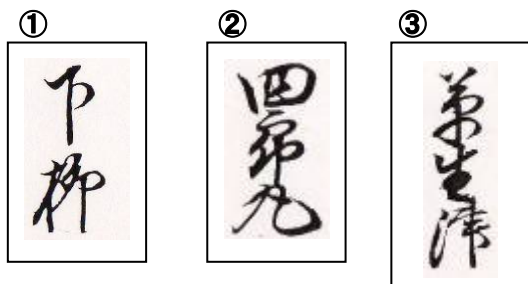
なお、「御邑古風談」（宝暦10年刊）は『北越名流遺芳』などで余慶著とされているが、栄軒著である。昭和6年の展覧会でも高野永貞（栄軒）の著作として出品されている（昭和6年『長岡市史』では永貞撰と記述）。長岡市立中央図書館には書き写された同書が残されており、山本老迂斎の記した序文で栄軒を「多年の碩学有用の実材」と評している。

また、同展覧会には高野貞通の著作として「高野余慶傳」も出品されていた。貞通は余慶の曾孫である（高野家は余慶の後、貞恒一貞時一貞通一貞吉と続く。貞吉は山本五十六の実父）。貞通は、戊辰戦争の際に壮烈な戦死を遂げた。これも所在不明である。（金垣孝二）



【参考文献】

- ・今泉鐸次郎編『北越名流遺芳』第2集（目黒書店、1915年）
- ・『長岡市史』（1931年）
- ・『長岡市史』通史編上巻（1996年）
- ・『ふるさと長岡の人びと』（1998年）



古文書の読みと住所・氏名・電話番号を、葉書・FAX・メールで文書資料室へお送り下さい。全問正解者から抽選で5名の方に粗品を進呈します。平成21年3月1日必着です。なお、当選者の発表は品物の発送をもってかえさせていただきます。

【前回の答え】①釜ヶ嶋（島） ②岩野 ③飯嶋（島）

《新たに公開した所蔵資料一覧》

※寄贈・寄託順。保管場所の都合で当日閲覧できない資料もあります。

- ・ 閑院宮・牧野忠篤長岡市長他記念写真(1点、明治40年か、真木一郎氏寄贈)
- ・ し尿浄化槽建設計画反対運動写真(12点、昭和32年、椿洋一氏寄贈)
- ・ 三島郡雲出村山田家文書(873点、近世～現代、古文書(検地帳等)・明治期教科書、山田修氏寄贈)
- ・ 雪まつり・長岡まつり等写真(9点、昭和30年代か、三浦則夫氏寄贈)
- ・ 新潟市西蒲区林家文書(1点、屏風下張り文書、長岡城の絵図(年不明)、林さほみ氏寄贈)
- ・ 三島郡三島町上岩井安達家文書(5,376点、和装本・図書(哲学・醸造・文学全集・美術全集・郷土資料等)・雑誌(写真)・明治期教科書他、安達香氏寄贈)

●文書資料室開室10周年を迎えて

今年、文書資料室は開室10周年を迎えました。長岡市史編さん事業で収集した資料の整理・保管・公開を目的に誕生した文書資料室は名称も「ぶんしょ」ではなく、古文書を主に扱う意味合いから「もんじょ」を選び、出発しました。3年後の平成13年度には、各種講座の開催もあって年間利用者数が1,000人を超えました。

平成16年10月23日に発生した中越大震災と、その後の平成の大合併は、当室の業務を大きく変えました。被災資料の救済・整理、災害アーカイブスの収集・整理・公開、市町村合併に伴う歴史的公文書の整理・保存が緊急の業務となりました。市史編さん事業で収集した資料のみを対象とする制約は消滅し、公開資料の数は倍以上になると予想されます。所蔵資料から見ると「もんじょ」は「ぶんしょ」に移行しつつあるのかもしれませんが。

当面の課題は、公開している資料をどうしたらもっと活用してもらえるか。文書館の整備とも関わり、鋭意努力が必要です。(金垣孝二)

《編集後記》▽アーカイブ (archive)は「文書館」などと訳される歴史的な文書を保存・公開する施設です。ライブラリー(図書館)やミュージアム(博物館)と同様に、文書資料室がもっと親しまれる存在になってほしいという願いも誌名には込められています。▽11月9日まで「災害アーカイブス展～避難所の記録と記憶～」を開催しました。展示会の準備は初めての経験だったので、周りのスタッフは「大丈夫かな？」とヒヤヒヤしていたようですが、なんとか無事終了。この場を借りて来場して下さった方々、関係各位に感謝の言葉を述べたいと思います。どうもありがとうございました！(薙澤)▽ご寄稿いただいた田辺芳春氏に御礼申し上げます。業務が錯綜する中でスタッフ一丸の8割です。ご感想をお待ちしています。(田中)

平成20年12月1日発行

編集・発行：長岡市立中央図書館文書資料室

スタッフ：金垣孝二、古川絵理、稲垣美知子

小林良子、桜井奈穂子、田中洋史、薙澤 梓

〒940-0065 新潟県長岡市坂之上町3-1-20

(長岡市立互尊文庫2階)

TEL0258-36-7832、Fax0258-37-3754

E-mail: monjo@nct9.ne.jp

開室10周年記念歴史講演会「長岡市史の前後」

平成20年12月13日(土) 於長岡市立中央図書館

講師：井上慶隆氏(前長岡市史編集委員会参与)